カトリック
仙台教区報

No.242　2020年12月6日
発行：カトリック仙台司教区
〒980-0011 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

新しい風に訊（き）け！

～成井 大介 新潟司教 叙階について、想う～

成井新潟司教と菊地東京大司教

東日本大震災直後から、仙台教区サポートセンターの設立に尽力され、活躍された成井大介被選司教（神言会 S.V.D.）の新潟教区 司教叙階式・着座式が 2020 年 9 月 22 日、新潟教区カテドラルで行われました。

式は新型コロナウイルス感染症予防のため、司教団、教区内の司祭、各地区の代表信徒の参加で行われ、仙台教区からは小松史朗神父が参加いたしました。

季節の移ろいを風で感じる。今の風は晩秋から初冬を告げる心地良い冷たい風。今年は寒さが厳しいとの見立てもあるが、心配するも何ともならない。風が運ぶのは季節だけではない。コロナウイルス感染症もまた風（空気の動きに）によって拡散され、猛威を振るう。これまたどうすることもできない無力さを地球規模で徹底的に感じているのである。季節の移ろいも、一部の病原菌やウイルスの類も、風によって運ばれる、その風がどこから来て？どこに向かい？どのくらい吹くのか？人間には予測はできても、太刀打ちできない。

風が運ぶものによって、人間は一喜一憂するのだが、ウイルスや花粉症のように実体を伴うものもあれば、季節の移ろいのように実体は、単なる暖かい空気、冷たい空気の流れだけなのに、私たち人間の心の想像力をかきたて、そこから派生して、イマジネーションを膨らまし、一人一人の心が創造され豊かになるものもある。その典型が日本特有の文化である「俳句」の中に読み取れる。「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」。暮らしの中で、風を感じ、その風から目に映る木々の青葉、耳に聴く鳥のさえずりを想像する。さらにまた、暮らしに戻り、食膳の初鰹に思いが至るのだ。春の香りから夏の匂いへと変わる風、その中に、これだけのことを想像し、心の豊かさが創造される。人間の不思議な崇高さを感じつつも、風のありがたさにも驚かされる。

あたかも語り掛けるかのような風の働きから、言葉と記憶を呼び覚ます関係性と、その働きを

神そのものとしてとして捉え、その類いまれなる宗教観を育んだ、と言うより働きを徹底的に信じた民族がいる。言わずと知れたユダヤ人であり、一神教のユダヤ教である。風は神の息吹であり、その霊であり、人間は、その霊に訊くことだけが、唯一の神のみ心を知る生き方に他ならないと信じる。風から、言葉と記憶と人との間に起こる体験と出来事が呼び覚まされ、その出来事に神の恵みを悟り、同時に新しい者として創造されたことを知る。出来事に神の恵みを訊く。私たち人間の心の奥底から湧き上がる言葉(いのり!)を訊く。「イスラエルよ! 聞け!」が最も短く、最も大切な、「語る神！聞く民！」を現すいのりとなり、宗教となった。キリスト教もそこを根に持つ。ガリラヤのイエスこそ、「語る神! 聞く民! 」の関係性から、徹底的に父なる神に訊く生き方を人々に伝え、父なる神がそうであるように、イエスもまた自らの最も大切ないのちを十字架によって差し出し、弱者の悩み苦しみと共に歩む生き方を、人々に証しした。キリスト教では父なる神とイエスから発出される聖霊（息吹!)によって、私たち人間のあ

集まった司教たちと教皇大使代理トゥミル参事官

りようとその関係性が必ずや、日々新しくされ、良いもの(復活!)になることを信じている。

出来事の中に風を見る体験で言えば、お隣の新潟教区ではあるが、「成井大介師の司教叙階式」に新しい風としての神の息吹を感じた。必ずやこの風は日本のカトリック教会に大きな恵みをもたらすに違いない。そして、いつの日か近いうちに我が仙台教区にも新しい風が吹く日が来る。

小松 史朗 神父（仙台教区使徒座管理者）

床にうつ伏せとなり諸聖人の連願を唱え、主への取り次ぎを祈る

会衆を祝福する成井大介新潟司教

式を終えて新旧の新潟司教に花束が贈呈された

教区内外から集まった方々が新司教誕生を祝った

駐日教皇大使ジョゼフ・チェノットゥ大司教逝去

駐日教皇大使ジョゼフ・チェノットゥ大司教は、2020年９月８日午前１時29分、入院先の東京・聖母病院で、小脳梗塞による大孔ヘルニアのため逝去しました。

脳梗塞のために倒れられ、重態と知らされたのが、今年の５月８日でした。菊地功東京大司教からの願いもあり、信者たちは回復を願って祈っていました。しかし、76歳で天のみ国へ旅立たれました。

チェノットゥ大司教が駐日教皇大使として日本に着任されたのは、2011年10月20日でした。大使として多忙な中、東日本大震災被災地へ2011年11月９日に訪ね、被災者を励まし、亡くなられた方のために祈ってくださいました。

奥山仙台市長（当時）を訪問するチェノットゥ大司教

被災の跡も生々しいころ、宮城県名取市閖上などを回られ、仙台市役所では奥山市長と面談しました。その後、バチカンから福音宣教省のフィローニ枢機卿が福島を中心に視察なさったとき、大使は案内役を務めてくださいました。

フィローニ枢機卿に被災地を案内するチェノットゥ大司教

チェノットゥ大司教は、感謝とねぎらいの言葉を忘れない、柔和で、謙虚、人に寄り添うようなお人柄で、会う人を魅了なさる方でした。日本以外の赴任先（カメルーン、トルコ、イラン、ベルギー、スペイン、北欧諸国、中華民国（台湾）、中央アフリカ共和国、チャド共和国、タンザニア連合共和国）でも同様でした。

2020年９月17日、午後２時から、東京カテドラル聖マリア大聖堂において、追悼ミサが高見三明長崎大司教（日本カトリック司教協議会会長）の主司式で行われ、日本の司教団、各国大使夫妻が参列しました。出棺の時は外交儀礼にのっとり、陸上自衛隊特別儀仗隊が派遣され、厳粛に挙行された葬儀は終了しました。

チェノットゥ大司教の遺体は、ただちに母国インドに運ばれ、インドの国葬としてシリア・マラバル典礼で行われました。

Sr. 長谷川 昌子

仙台カテドラル大聖堂で東日本大震災の追悼ミサを捧げた。
左から福音宣教省フィローニ枢機卿、平賀徹夫（名誉）司教、駐日教皇大使チェノットゥ大司教、菊地功大司教、小松史朗神父

教区の諸活動

安全性と精神性
パンデミックの真っ只中の若者のミサ

2020年の流行語、それはおそらく「ソーシャル・ディスタンス＝社会的距離」ではないでしょうか。Covid-19のパンデミックのこの時期、私たちはお互いの交わりに距離を置くように求められていますが、私たち若者は、つながりを切望しています。この現象は、特に若者にとって、多大な不安と困難をもたらしています。

今日のカトリック教会の若者の宣教活動についてのチャレンジは、私たちが、集まることのできない青年と、どのようにつながりを持つかということです。

たしかに、オンライン会議、講義、マスコミなど、他の人とつながる方法についていくつかのイニシアチブが行われました。なおその他に、このパンデミックの時代に生きるそれぞれのクリスチャンの信仰を保ち続ける方法に関する多くの資料をオンラインで見つけることができます。つながりを作るためのさまざまな創造的な方法にもかかわらず、若者は、なおかつ、人と直接会う必要性を感じています。

教会の青年会リーダーのモニカ・大野とフェルディ神父（フェミニアラガオ・フェルディマール 仙台教区青年指導者）、そして青年会の他のメンバーが８月に集まり、コロナ禍の真っ只中において、またその後の若者の信仰を活気づけることについて話し合いました。いくつかの提案と議論がありました。しかし、青年会の共通の心情と意見は、安全性を、精神性と同じくらい重要な事として扱うことでした。当面、青年会は、Covid-19 ウイルスのまん延を防ぐための予防措置（仙台教区が設定）を考慮しながら、毎月のミサを行うことに決定しました。

２020年８月22日、月の第４日曜日、仙台教区の青年会は月例ミサを始めました。

ミサの間、歌うことは許されていませんでした。それで、サックスやリコーダー、ギターなどの別の楽器で演奏されました。

翌月の若者のミサでは、参加者の数が少し増えました。最近の集会に数人の外国人青年も参加しています。そこで青年会は、教会に若者を増やし、彼らの信仰を強め、キリスト者として彼らが宣教の使命に呼びかけられていることを深めるために、将来に向けて、今後何をすべきか引き続き見極める必要があると感じました。そのため、今後、数か月間の次の活動を考え出しました。

1）10月、青年会は、聖母マリアに花を捧げるというベトナムの伝統にしたがい「ロザリオの月」を祝います。
2）11月に、私たちは、私たちのもとを去った故人のためにミサをお捧げします。
3）12月には、安全対策を心掛けながら、クリスマスミサと有意義な集会を行って祝います。

現在、ｃｏｖｉｄ-１９のパンデミックの時代は、けっして正常な社会状態とは言えませんが、若者たちにとって正常な状態の社会があるとすれば、確かなことが一つあります。それは、私たちのカトリック教会こそが、そうであるべきなのです。

仙台教区外国人支援センター
クラリタ・サンチェス

仙台教区でのベトナム語ミサ

研修生や技能実習生として日本に入ってきているベトナム人の数は、近年大幅に増加しています。Statista Research Department（＝統計調査部門；ＵＳＡ）によると、2018 年には約33万人のベトナム人が日本に住んでいました。その中のかなりの人数がカトリック信者です。ベトナム人の多くは、比較的良い生活をしているとは言え、ベトナムと日本の文化・習慣の違いがあり、劣悪な労働環境と居住環境の中で、賃金の不法天引きや労働災害、事故や犯罪に巻き込まれ、最悪の場合は自殺する人が少なからずいます。

こうした状況の改善と技能実習生たちを支援するために仙台教区外国人支援センター(SDSCF)は、1993 年3月に発行された「国籍を越えた神の国をめざして」（ステファノ濱尾文郎大司教）を手掛かりに、海外から来日する人々を歓迎する環境を作るためのいくつかの活動を開始しました。

コロナ禍によって研修生や技能実習生の環境は一段とはかばかしくないだけに、単に彼らを歓迎するだけでなく、SDSCF ではさまざまな違いを尊重する共同体を構築するよう務め、それによってあまねく日本全体に教会の普遍性を証しすることを目指しています。こうした移民移住者は、キリストにおいて皆、兄弟姉妹であり、早急で確実な支援が教区内各地で求められています。

仙台教区では過去数年間、東京教区のピーター・マリア・グエン・フウ・ヒエン神父が年4回ほど、仙台の元寺小路教会でベトナム語のミサをしました。そして、今年は神言会(S.V.D.)のベトナム人司祭 ジョン・トラン・ナム・フォン神父を仙台教区元寺小路教会にお迎えすることができました。

フォン神父は、仙台教区内のさまざまな教会を回って、ベトナム人のためにミサを行ってい

第 7 地区 野田町教会

ます。昨年８月23日には福島市野田町教会で、ほかには盛岡で7月26日、8月3日、10月15日。八戸では10月25日に同様にミサを捧げ、それぞれの教会で歓迎されました。しかし、コロナ禍によってミサの予定を取り消さざるを得ない教会もありました。

仙台教区のさまざまな小教区で行われるベトナム語のミサは、ベトナム人が教会の一員として日本の共同体に参加するのを助け、彼らがそれぞれの地域の信徒とより自由に交流し、協力できるようになるために行われています。これは、さまざまな人々と共に、一つの教会を作りあげるための小さな一歩です。ベトナム人以外の人たちとも「国籍を越えた神の国」を実現するまでには長い道のりがあります。

仙台教区外国人支援センター
クラリタ・サンチェス

第３地区 四ツ家教会

第２地区 八戸塩町教会

第１地区 弘前教会

【仙台教区司祭会・教区司祭団合同役員会から】

平賀徹夫司教の引退願いが３月18日教皇フランシスコによって受理され、仙台教区は司教座が空位になりました。それに伴って、新しい司教が仙台教区に着座するまでの間、使徒座管理者に教区事務局長を兼任する小松史朗神父が任命され就任しました。

教区ではただちに司教不在中の教区内の必要事項を検討、決定するために、司教空位による司祭評議会と宣教司牧評議会の解散を受けて、責任役員６名で教区顧問会を発足させました。

教区顧問会は今後の教区の動きなどについて話し合う場として、従来の司祭評議会・教区司祭団合同役員会を「仙台教区司祭会・教区司祭団合同役員会」として毎月開催することを決め、教区の動きを止めないように４月初めから活動を開始しました。

合同役員会は、教区として必要に応じて決定すべきことを話し合い、教区、地区、小教区、教区で働いている司祭の動きなどの情報交換を行い、教区の活動を円滑に継続するように活動しています。

これまでの主な議事は、コロナウイルスへの教区としての対応、教区の会計に関すること、外国人司牧に関わることがあります。重要な案件としては司教座空位時にはできるだけ控えるべきとされる司祭人事の検討があり、これはあくまでも必要最小限の対応として検討、決定されます。

仙台教区は東日本大震災から10年が経過するなかで、司祭・修道者・信徒の減少が続き、少なくない問題、課題を抱えています。中には早急に答えを出さなければならないものもあります。合同役員会は信徒と司祭が心を合わせて祈り、前に向かってともに歩むことを願いながら、委ねられた責任を果たすべく活動していきます。

板垣 勤　神父

各地区からのお便り

コロナ禍で揺れる仙台教区において、お二人の神父さまが叙階金祝をお迎えになりました。司祭叙階から50年、おめでとうございます。

シャル･エメ･ボルデュック 神父
（ケベック外国宣教会　M.E.Q.）
第 7 地区　野田町教会

堀江 節郎 神父
（イエズス会　S.J.）
第 3 地区　釜石教会

第 7 地区より

〈エメ神父様、金祝おめでとうございます!〉

今年金祝を迎えられたエメ神父様のお祝い会が 9月 5日に野田町教会、6 日に松木町教会でありました。エメ神父様の司祭叙階は 1970年 5月 24 日ですから、金祝の日は 2020年 5 月 24日なのですが、今年その時期は新型コロナウイルス感染症防止のため仙台教区内も教会活動は中止されていたため、約３か月半遅れてのお祝い会となってしまいました。

金祝記念ミサを捧げた後、信徒の皆さんからお祝いの演奏披露と続き、また、エメ神父様の半生を紹介するスライド上映もあって、野田町教会と松木町教会の信徒の方々が知らない時代の若いエメ神父様の姿に歓声が上がる場面も。エメ神父様からも記念の品として、司祭の道を選んだ話が掲載されている『続･なぜこの道を』の本をプレゼントしてくださいました。全くの手作りでささやかな会でしたが「温かいお祝い会だった」とエメ神父様も喜んでくださり、集まった全員がこれからもエメ神父様の変わらぬ笑顔とご健康を祈りました。

花束贈呈（9 月 5 日 野田町教会）

渡邉 祐子（野田町教会）
駒田 瑞穂（松木町教会）

記念写真（9 月 6 日 松木町教会）

訃　報

フランシスコ･ザビエル 横島 健二 神父

仙台教区司祭フランシスコ・ザビエル横島健二神父は、2020年7月13日午前2時に光ヶ丘スペルマン病院（仙台市）にて、老衰のため帰天いたしました。81歳でした。神父は53年の長きにわたり司祭職を全うされ、幼稚園の園長も兼任いたしました。

神父の永遠の安息のためにお祈りください。

次の原稿は、横島神父が生前、2018年に教区報に投稿され未掲載になっていたものです。晩年の横島神父は、執筆意欲が旺盛でこの他にも多数、投稿がありました。

〈略歴〉

1939年7月12日生まれ
1966年　司祭叙階
1967年　元寺小路教会　助任司祭
1973年　大湊教会　主任司祭
1984年　元寺小路教会　主任司祭
1987年　八戸塩町教会　主任司祭
1995年　会津若松教会　主任司祭
1998年　教区会計
2001年　大船渡教会　主任司祭
2008年　築館教会・米川教会　主任司祭
2009年　八戸塩町教会・鮫町教会　主任司祭
2012年　八戸塩町教会　主任司祭
2014年　地区制開始：第2地区担当司祭
2015年　引退（司祭の家）
2020年7月13日帰天　81歳

出生前診断

司祭の家　横島 健二 神父

科学が進み現在では、生まれる以前にダウン症とか遺伝性のある障害を持つ子どもが生まれるか否かが、ほとんど確実に診断できるのだそうである。その出生前診断を断った若い夫婦の話が、今日のテレビニュースで放映されているのを見た。断った理由は、夫婦で話し合い「生まれてくる子どもに障害があろうとなかろうと、わたしたちの子どもなのだから、たとえ障害があったとしても同じように大切に育てよう」との決断の結果であると話していた。

来るものは来る、来ないものは来ない。何を決断したからといって決断しなかったからといって、来るものに変わりあるわけではない。来るものは何であれ結構、引き受けるという覚悟を持ってさえいたら、限られた一生をどれほど有意義に不安なく、精いっぱい楽しんで生きられることであろうか。不安や心配は、いつも未来からやってくる。何が来ても結構という腹が決まっていれば、この世に基本的な心配ごとはなくなり、毎日を一番のびのびと大らかに過ごせるに違いない。

これはキリスト信者がキリスト信者として生きることを決めたことと、まったく同じことではないだろうか。キリスト信者になるとは、主イエスさまが御父である神のお望みになることであるなら、十字架上の苦しみであれ死ぬことであれ受け入れると決断したように、神が与えるものは何であれ選り好みせずにいただくという決意なのではあるまいか。

わたしたちキリスト信者はせっかくキリスト信者になったのだから、若い夫婦のように、与えられた日々を精いっぱい楽しんで生きる生き方を身につけたい。

横島神父さんありがとう

日曜日に教会のテーブルの上に、横島神父さんの葬儀用のカードが置いてありましたので、私はそのカードを一枚頂戴しました。カードには神父さんの写真とともに聖書の言葉が書いてありました。

その聖句は（マタイ 20 章 19・20 節）にある一節です。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」と書いてありました。

ある神父さんが横島神父さんの話をしてくださいました。

遠く海外から日本に来て生活していた方の話です。その方が真冬に暖をとるストーブもなく困っていた時に、横島神父さんは教会の方々に声をかけてその外国の方のために走り回りストーブを調達して届けたそうです。また、ある方がお金の工面に困っていた時に、神父さんはご自分のお金をご用意して差し上げたというお話です。

どのお話もこの聖句に書いてある通り弱い立場にある方々に深い同情といたわり、優しさをもって接してくださっていたのだと思いました。親切で、慈しみ深い行いをもって、生涯困っている人、苦しんでいる人に捧げた神父さんだったのかなと思いました。

何年か前のクリスマスに神父さんは赤い折り紙をたくさんお持ちになりました。その折り紙を使って皆でサンタクロースを折りました。一つ一つ丁寧に折り方を教わりサンタクロースを作りました。私の心に残る楽しいクリスマスの思い出です。

今年も、もうすぐクリスマスの時期がやってきます。横島神父さん、今年はどこで折り紙をしていますか？

「横島神父さん、ありがとう。」

神父さんに出会えて本当に良かったです。

横島神父さんの永遠の安息のためにお祈りいたします。

石井 きえ子（西仙台教会）

とことん

「神様ってほんとにいるんですかね」

新任の神父様の説教はこの一言で始まった。聖堂が凍りついた。何てことを言い出すんだ、このお方は。天から火が降ってコヒドロ山※が吹っ飛ぶぞ。※コヒドロ山＝大船渡教会が立つ丘の名

「神父が言うから信じているんですか。偉い人がそう言うから信じているんですか。人の言うことをうのみにするのはやめなさい。わたしだってほんとはわからないんだ」

「あの～」と誰かが手を上げた。気仙衆は物怖じしない。神父様のお説教の最中でも、納得がいかないと声を上げて反論する。恐らくこんな教会は世界中でも珍しかろう。

「そんだらなして 神父様はそこで 御ミサを捧げているのす？」

神父様の目が輝いた。両手を振り回して説教壇から跳び降りた。

「読み、読みですよ。われわれは天地万物を眺めてこれを生み出し動かしているものがあるに違いないと、そう読んでいるんです。物事の後ろに隠された本当の意味を一所懸命に読む。その読みにはその人の人生がかかっている。だから自分で考えなさい。とことん考えなさい。納得できないなら、むやみに信じてはいけない。人の言うことを考えもせずにうのみにするのを盲信という」

自分の頭でとことん考えろ。神父様はとことんという言葉が大好きだ。いつも連発する。信徒席の間を跳び回り、とことん話し合って、また祭壇に戻る。みんな自分の頭で考えろ。とことん考えろ。御ミサの後のお茶飲みはとことん話に花が咲く。

それが高じて週二回、それぞれの都合に合わせて聖書を勉強する会が開かれた。わたしも常連になった。たくさんのことを学んだ。

ケセン語訳聖書出版記念ミサにて

わたしが『ケセン語訳聖書』を書いていたのはその頃のことだ。神父様はそれにとことんつきあってくださった。週に一度か二度、わたしの原稿に目を通し、一字一句もおろそかにせず、夜更けまで議論した。

完成した時、われわれはうれしさに跳び上がり、これを持ってパパ様に差し上げに行こうと考えた。神父様は早速万端の手配をしてくださった。

本の最後に神父様への謝辞を書いたら、絶対に俺の名を出すなと青筋立てて叱られた。その剣幕がすごいので渋々引っ込めた。その彼はもういない。感謝を公にしても墓の中では怒られまい。あの世でとことん叱られよう。

横島健二神父様、ありがとうございました！

山浦 玄嗣（やまうらはるつぐ）（大船渡教会）

追悼　横島 健二 神父様

横島健二神父様。大船渡教会では平成13年4月から７年間、個性豊かで優しい神父様の司牧にあずかりました。真っ直ぐな行動力と子どものような探求心には驚きや笑いを生みました。右の手に左の手の善業を知られない人助け。熱弁にあふれたご説教。教え、想い出は消える事はありません。今は使命を終え主の御国での永遠の安息をお祈りいたします。感謝の言葉とともに。

金野 ヨシノ（大船渡教会）

司　祭　紹　介

ミゲル･アンヘル･ヴァレラ･チャヴェズ神父（グアダルペ宣教会 M.G.）

召命物語

私には、それほど際立った召命の物語はありません。私はたまたま熱心なキリスト信者の家庭で育ちました。父は、信仰深い人で、私のキリスト教的価値観を形作る上で重要な役割を果たしました。私たちは毎週日曜日のミサに行ったものでした。幼い頃、教会で働くことはとても良いことだと思いました。侍者グループに属していた私たちのプログラムの１つに、地域にあるさまざまな修道会の神学校を訪問することがありました。私たちは、グアダルペ宣教会を訪ね、そこで、韓国に派遣された宣教師に心を打たれました。私がグアダルペ宣教会で神学校の予備期間の活動に参加している間、異なる宣教地域で３週間の宣教活動をしました。そこで、私は、グアダルペ宣教会に入ることを決意し、1965年に13歳で小神学校に入学しました。神学校生活を楽しく過ごしました。宣教師として成長するために私は、1976 年 2 月に日本に派遣されました。イエズス会で日本語を勉強し、東京のカトリック神学院に入学しました。しかし、1982 年にメキシコで司祭として叙階されました。私は召命活動のためにメキシコで４年間過ごした後、1986 年、私は日本に戻りました。

日本に来ておよそ 30 年になります。私は福島県の種々の教会に 10 年間、岩手県のいろいろな教会に８年間派遣されていました。現在は、青森県弘前市に配属されています。

仙台教区への貢献

私は日本に30年間滞在して、消費主義の成長と高度な最新技術の進歩を見てきました。ある意味で、このような発展は日本社会に利便性をもたらしました。しかし、こうした発展の半面には、個人主義の増大をもたらす強い傾向があります。

私が、カトリックのキリスト教共同体を形成する必要性を強調したいのはこの領域です。つまり、イエスの人生と教えに基づきイエスを中心とした共同体であり、秘跡を通して、人生のあらゆる瞬間に神の恵みと愛の存在を認める祈りの共同体であることです。

教区の信徒の皆さんのための希望とビジョン

仙台教区のさまざまな教会に私が望むことは、私たちが相互に依存して一つの教会になることです。地元の教会共同体だけでなく、教区共同体を作りましょう。特に日本で働く外国人が多い今日、国境を越えて他者の違いを受け入れていきましょう。共同体を作り、共同体の一員になり、共同体となり、一つの共同体を作っていきましょう。イエスの人生と教えを中心とした教会の共同体と人々が交わることができるように創造的になりましょう。これらの人々にイエスへの信仰を誇りに思ってもらいましょう。私は教区が一つの教会共同体として一緒に働き始めたことを知っています。私たちはただカトリック・キリスト教共同体を築くように協力し、そして参加することによってそれを強化する必要があります。

パトリック・カストロベルデ神父
（淳心会　C.I.C.M.）

生年月日：1979 年 11 月 05 日
出 身 地：フィリピンのセブ島
助祭叙階：倉敷教会（広島教区）2008年11月15日
司祭叙階：セブ島　2009年5月16日

司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？

私が、「司祭」という言葉を初めて耳にしたのは小学校６年生でした。それはヴィンセンシオ宣教会の神父様の叙階式および祝賀会の時でした。なぜ大勢の人々が集まったり、騒いだり、盛大に祝っているのかが分からなかったままずっと最後までパーティーに参加していました。ある方に聞いてみると、「司祭叙階のお祝いだよ」と教えてくれました。それだけでなく、司祭叙階されたのは近所の方であり、私の親戚だと後で分かったのです。その時から、印象深い出来事が記憶に残り、高校4年生のころに「あの神父様のようになりたい」という思いを強く感じました。大学に入る直前、将来は海外で働きたいという願望があったので、「宣教師ならば行ける!」と思い、16歳で宣教会でもある淳心会に入会することを決心したのです。“まだ神父の卵”だった私は 2005年日本に派遣されました。今は、仙台教区の広い第３地区（岩手県）で働かせていただいております。

司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？

広島教区や大阪教区に宣教師として任命されたことがあります。現場での経験の中で、最も大切なことは人々と共に歩むことです。うれしい時も、辛い時も。それこそ福音という“良い知らせ”が間違いなく心に届くでしょう。神様から私にいただいた賜物や使命を司祭職を通して人々に快く分かち合っていこうと思います。今まで司祭生活において人々との関わりを歩ませていただいたことで、教えたことよりも教えられたことの方が多いです。例を挙げると、昨年から四ツ家教会で信徒と共に信仰入門講座を開催したことによって、新型コロナウイルス感染症の真っ只中にも関わらず、大人５人、子ども４人が洗礼の恵みを受けることになりました。これは共にいてくださった信徒のご協力や努力が実ったからこそ、教会全体に“福音の喜び”が伝わってきたのではないかと。これからも福音宣教の実をより多く結ぶために教会の皆さんと一緒に歩み、精いっぱい働いていきたいと思います。

今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒への呼びかけ（希望）があれば、教えてください。

私は、6 年間大阪 JOC（カトリック青年労働者連盟）の協力者として関わらせていただきました。その間、国際的会議に出席し、全国青年大会にも参加した体験が多々あります。活発な青年たちと出会い、彼らの生活や厳しい現状を肉眼で見ることができたのです。残念なことに、現代教会には日本人青年らの姿が見えないという状況が続いています。子どもや青年がいないと「さびしいなぁ…」とひとりつぶやいてしまう。今私が働いている第３地区各教会には地元の若者よりも外国の方々、とりわけ活気あるベトナム人たちで高齢者の数多い教会に気力やエネルギーがいつも満ちあふれているように感じます。彼らの熱心さと信心深さによって、教会の元気さを取り戻したと言ってもいいでしょう。可能な限り、各教会で外国人だけでなく、日本人の子どもや青年たちと接触し、信徒と一緒にさまざまな方法に取り組んでいこうと思います。そして開かれた教会で子どもや青年の居場所を共に創っていこう！

ジョン・トラン・ナム・フォン神父
（神言会　S.V.D.）

私の名前は、ジョン・トラン・ナム・フォンと言います。誕生日は 7 月 29 日です。私は 2018 年 12 月 27 日に神言会（S.V.D.）の司祭に叙階され、2019 年 5 月 2 日に日本に派遣されました。司祭になりたいと思い始めたのは、中学生のときでした。その当時私の教区の司祭はある重い病気のために長い間入院していました。それで、私たちは全くミサにあずかれませんでした。その時、私は、私たちの教区に司祭がいない間ミサを祝うことができるように、司祭にならなければと思いました。神言会の宣教司祭

になった今でも、司祭でありたいというその願望は私の心に残っています。神の恵みに感謝します。

名古屋市で１年間日本語を勉強した後、仙台教区に配属されました。仙台に着いてから半年になります。最初の２か月は、Covid-19 のパンデミックのため、自粛生活に費やされました。しかし、私にとってはすべて新しい環境でしたので、これに慣れていくために良い機会でした。同様に、仙台教区では個々の司祭が特定の教区に任命されているわけではなく、チームとして働き、共同体として一緒に暮らしています。実に、私は神言会の同僚たちや教区の他の司祭の助けを借りて、徐々に司牧活動を身に着けつつあります。これは、教区の信徒たちの文化や信仰形成、人生における課題、そして司祭に対する彼らの期待についてもっと知るための重要な機会です。

仙台教区の信徒の数は減少していますが、それは、高齢化と少子化により、教会に行ったり、教会の活動に参加する若者や子どもが少ないためと思われます。私は、最初の印象として悲しくなりました。しかし、私は働き始めながら、神の愛が教会をより活発で生き生きとさせるために神秘的に働いていることに気づきました。

ここ数年、外国人労働者、学生、そして移住者の数が急速に増加しています。彼らの多くはカトリック信徒です。彼らは日本の教会を新しい将来に変えていると思います。これは、事実、神のなせる奇跡的な行動です。

仙台には20歳から30歳までの若いベトナム人カトリック教徒がたくさん住み、働いています。彼らは積極的に教会に行っています。しかし、彼らの中に私が気付いた問題点は、日本語と日本文化のことで地元の教会に融け込むことが難しいということです。彼らが所属する小教区が、彼らが教会に馴染んでいくように協力することを希望しています。つまり、地元の教会の文化や伝統にうまく適応すると同時に、ベトナム人固有の信仰の在り方を失わないようにする事です。

宣教師として、仙台教区の司祭の皆さんと一緒に仙台の人々に奉仕する機会を与えてくださった神の恵みに感謝します。私たちの前にはまだ多くの課題があります。特に、現在Covid-19パンデミックに直面しています。しかし、仙台教区の一つの教会として、そして神の民として一緒に、私たちはアビラのテレサの祈りに慰めを見いだすことができます。「何事にも心乱されず何事も恐るまじ。なべては過ぎ去り神のみ変わり賜わず。忍耐はすべてを得べし。神を所有し奉らば 何事をも欠かず神のみにて足れり」。

第8回「いのちの光 3･15 フクシマ」開催のご案内

第７回「いのちの光 3･15 フクシマ」は、新型コロナウイルスの感染が広がりつつある中で、やむを得ず〈中止〉の決断をせざるを得ませんでした。コロナ禍がまん延していく中でも、原発事故の被害・処理問題は増える一方で、地元福島のみならず今では全国に拡大しています。ことに「トリチウム汚染水」の処理問題は決定次第では今後国内ばかりか国際的にも汚点を残すことになりかねません。（10 月末現在）

第８回「いのちの光 3･15 フクシマ」は、以下のような形で執り行うことになりました。

「いのちの光3･15フクシマ」代表：勝治 美喜子

○と　き：**2021年3月13日(土)** 14:00～16:00
○ところ：**元寺小路教会 大聖堂**
○講　師：**伊藤 延由 氏**　　**〈入場制限あり〉**

2021年3月14日(日)の各小教区のミサの中で「福島のための共同祈願」をお願いいたします。

〈福島のための共同祈願〉

2011年の東電の原発事故から、早くも満10年を迎えます。世間からは何事もなかったかのように過去のこととして処理されがちになっている現在です。しかし、原発事故被災者の中にはいまだに故郷に戻りたくても戻れない方々がたくさんいます。どうぞこれらの方々を心に留め、早く故郷に戻れますように。

編集後記

皆さま、いかがおすごしでしょうか。編集方法を少し変更しました。見やすくなっていればよいのですが。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com　　**次号発行予定日　4月4日（日）　原稿締め切り　1 月末日**